ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと〝風〟

第172号（２０２０年９月）

風に戯れて

白井啓治

（十二）文化が国を救う

（２００８年９月18日）

『月は朧に笑ろうてござる』

陽の沈む時間の日に日に早まってきて、それに同調するかのように虫の声も喧しくなってきた。秋の夜長が深まってくると感傷的な気分とともに国（ふるさと）を憂う気持ちも妙に深まってくるものである。これは多分に年齢の所為によるものだろうと思う。

最近、マスメディアの中にもようやく文化力ということが声高に言われ始めてきた。表現者の間ではこのことは古くから言われてきたのであるが、バブル崩壊以後２０年が過ぎてやっとこ文化とその力について気付いて貰えるようになってきたようである。

実際、小さな里村としての国も、日本国という国も将来にわたって暮らしを支え、救えるのは、文化力だと言える。確かな文化力によって構築された文化が暮らしを紡ぐ力となって国を救うのである。

風に戯れての話なので文化とは、文化力とは何ぞや、などのややこしくなる話はやめにするが、文化を定義する一つの言葉として「時の移ろいに洗われて継がるるは伝承」というのがある。

（絵：兼平智恵子）

文化力とは、人の暮らしを紡ぐ力のことを言い、同時にまた文化を確立する力のことを言う。文化を確立する力とは、物事の始まりの歴史の検証と現状の見直しをする力の事を言う。時の移ろいに洗われる、とはまさにこの始まりの検証と現状の見直しである。この洗濯によって綺麗になったものだけが文化として暮らしを紡ぐ力を発揮してくれるようになるのである。

一つの行事なりが伝統的に継承されて一つの文化として成立していくためには、始まりの検証と現状の見直しという文化力による手揉み洗いが繰り返し行われ、擦り減ったり色褪せたりせず、重厚な風合いを醸し出していくことが必要である。秋になってあちこちで地方文化と称したお祭りが繰り広げられる。また文化祭も行われる。今年は茨城県で国民文化祭が行われる。ちょうどいい機会だから、思うだけでもいいから「文化」「文化力」と自らに問いかけてみてはどうだろうか。

（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年７月より約１年間に亘り掲載されたエッセイを載せています。）

（詩：白井啓治　絵：兼平智恵子）

3.2　片野城址（太田三楽斎の城）

<現地案内板>

この城は、文永年間（1264～1274）の頃、小田氏の一族八代将監が小田城の北の守の砦として片岡から移り、佐久山に築いたと伝えられる。その後、佐久山の北にあたるこの一画は永禄九年（1566）ごろ、武蔵国岩槻から来て佐竹義重にここを預けられた太田三楽はここにきてから3～4年、佐竹からの招きに応じて、柿岡城の梶原政景と協力、小田氏を国外に追ってのあとも三男資武とともに片野城にいたが、天正十九年（1591）の秋、69歳で病死した。その後、石塚城（常北町）の石塚源一郎義国が城主となったが、やがて徳川の世となり、慶長七年（1603）に佐竹氏と共に秋田に遷り、次の領主羽柴壱岐守（滝川氏）が城の廃されるまで四代に及んでここにいた。

さて、片野城址は片野地区ではなく根小屋地区の山中にあります。この城は文禄年間初期までは柿岡城とともに小田氏側の城で、東の府中城大掾氏に対する最前線の城であった。文禄7年（1564）に上杉謙信が小田城攻撃などにより形勢は変り、佐竹義昭が制圧し、岩槻城主であり、北条に通じた嫡男・氏資に城を奪われて流浪していた太田（三楽斎）資正にこの城を与え、佐竹氏の小田氏征伐に対する出城的な役割を担ってきました。太田三楽資正は息子梶原政景を隣の柿岡城におき、共に協力して宿敵小田氏を筑波山麓の手這坂で打ち破り小田城を奪取しました。

佐竹氏から戦勝の褒美として小田城を与えられたがこれを息子の梶原政景に譲って、この片野城で死去しました（69歳）。

墓が高台に眠っています。太田資正はあまり知られていませんが、戦国時代の智力・武勇に優れた武将の一人と数えられています。

城址入口を登ると畑が広がっていました。そして、そこからは筑波山が美しい姿を見せていました。

城主太田資正（三楽）の五輪塔。片野城址の案内板より一つ石岡側の山の上にある。

太田資正の墓はこの堂の横にある墓所の一番奥にある。お堂は無人で「佐久山」（浄瑠璃光寺）と書かれており、訪れた時は、八重桜とツツジがきれいに咲き、ウグイスが啼いていました。

さて、太田三楽斎資正（すけまさ）という武将を聞いたことがありますか？この石岡の地に墓もあるのですが地元ではほとんど話題に上ることがありません。それなのに全国には多くの熱狂的なファンがいる。まあ埋もれた人物であろうか。太田道灌の曾孫で岩槻（岩付）城の城主である戦国武将として名前が知れているが、石岡の片野城の城主として間もなく入道となり、三楽斎を名乗った。

また手這坂の戦いで小田氏治を破った人物であり、はじめて軍用犬を使ったことで知られている。軍用犬は岩槻城に近い松山城の二か所に犬を飼いならし、片方の城が攻められたときにいち早く犬を放ってもう一方の城の味方に知らせたという。しかし、自分の城を子供に奪われ、佐竹氏に乞われて府中城と小田城との要の位置の前線で活躍している。

この片野城は、もと「小田天庵」の城であったが、小田氏（親北条派）と佐竹氏の覇権争いがし烈になり、この片野城を奪った「佐竹義重」はこの城を太田資正に預けました。そしてこの太田資正は小田氏を破る活躍をしたのです。また府中城が佐

竹氏に攻められた際には、応援の要請には応えず、手出しをしなかったようである。これは府中の大掾氏とも姻戚関係を結んでもいたことも関係したであろう。また、府中城が落城した後を、この太田三楽にあずける話もあったようである。しかし、この三楽を語る時に岩槻がでてきても石岡や片野、柿岡などがほとんど語られないのは何故なのだろうか。　最後まで上杉謙信への忠臣を貫き、謙信の死後直江兼続も高く評価していた知将して知られ、晩年には豊臣秀吉からは天下一の名将が、一国をとれないのは不思議だと言わせたともいう。孤独な生涯をおくったともいわれ、また最後まで岩槻を奪還する野心を捨てなかったといわれています。しかし一度石岡の片野の地を訪れ、城跡とお墓を探してみてください。

　戦国時代を戦い抜いた一人の武将も44歳の働き盛りからこの地で戦に明け暮れ、秀吉の天下統一の8年後に69歳でなくなるまでこの片野の地にいたのは確かなのです。最後は静かな境地になっていたのではないかと思わされます。戦国武将として大きな城もとれなかった人物ですが、もう少し日の目を見る機会に恵まれればと思います。

「片野排禍ばやし」(三楽が地元の禍を取り除くために始めたとされる）は7月の第3または第4日曜日と10月の第3日曜に地元の八坂神社のお祭りとして行われています。

〈片野排禍ばやし〉　県指定無形民族文化財

　十六世紀末、片野城主太田三楽が八幡神社を建立した際、わざわいを排するため奉納したことを起源としたと伝承されている。踊りは四番に区分される。はじめは獅子舞で、武家の威厳圧制を示すという。品格のある踊りである。二番目はおかめで、戦国時代の女性の忍耐とおおらかさを表現しているという。女形の踊りは巧みなしぐさとしなやかさで心和むものである。三番目はきつね踊りで速いテンポ、力強い足さばき、リズミカルな顔の表現など躍動に満ちたもので、農民の生活力をきつねの滑稽さを通じて表現しているという。最後はひょっとこでおどけた面の表情や洒脱なしぐさに観衆も引き込まれ、舞台にあわせて踊りの輪が境内に広がる。笛、鐘、大小の太鼓のはやしは各番の変化にあわせて絶妙にひびきわたる。……　（現地看板より）

我が労音史（22）

木下明男

　20代に参加した労音運動は、1970年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

1992年の社会情勢と音楽状況

　地球サミット(環境と開発に関する国連会議）がブラジルで開催１７８ヶ国が集まる。アメリカ大統領にクリントンが当選。自民党の副総裁金丸氏が佐川献金疑惑で逮捕送検され議員辞職。ユーゴスラビア連邦が崩壊し、内戦が激化。バルセロナでオリンピック開催、中学生の岩崎恭子が金メダル。ソマリア飢饉が深刻化、ＰＫＯ協力法が成立し自衛隊を国連カンボジア暫定統治軍に派遣活動開始。日本共産党が野坂参三名誉議長を除名。サイトウ記念エスティバル開始。この年開催のイスパニダ音楽祭（国際ギター文化協会主催）でファリャの“アトランティダ”（読響）を初演。ブタペストで開かれた国際指揮者コンクールで日本の本名徹二が優勝。柴田南雄（音楽評論家）に文化功労章、中沢桂（声楽家）にモービル音楽賞。

　この年に逝去された著名な音楽家・文化人：いずみたく（作曲家）・中村八大（作曲家）・長谷川町子（漫画家）・松本清張（作家）・尾崎豊（歌手）・岡田嘉子（女優）・守田正義（作曲家）・メシアン（作曲家）・Ｊケージ（米音楽家）・Ａピアソラ（作曲家）・大山康晴（将棋）・太地喜和子（女優）。

1992年の労音の動き

　第40回総会は、前年度未達成に終わった「会員１００００名１０００サークル３００名の委員」の目標を再度掲げ、機関誌の再刊、企画会議・懇談会の設定、委員会・運営委員会の充実、担い手の育成と会員制度の再検討等が運動目標として確認された。併せて、友好団体・協力団体・民主団体との協力共同行動の充実と、消費税撤廃・ＰＫＯ法案撤廃に向け行動することを確認。

　職場・地域を軸にした活動の弱体で組織（会員・サークル）低下が要因、会員以外の例会参加が多くなり、企画性（人気）と対外宣伝を中心とした活動が主になっている。安定した鑑賞組織にするために、会員制度の見直しと労音の組織基盤の確立を求められ、特に若い担い手や女性が必要

と位置付けられた。

一昨年の総会で、「地域・職場の音楽要求を基に独立労音を目指す」「全ての区や市に地域委員会を確立させ、地域・職場にサークル建設を行い、新しい担い手を育てる」「要求を基に例会を企画し、ブロック労音を建設する」「中央と地域の協力・共同の取り組みを進め、強大な東京労音を創る」を柱とした独算体制の方針は、3年目を迎え成果と問題点が報告された。

成果

1.例会の企画本数は増えた。

2.実情に合った例会が、其々の地域会場で設定された。

3.センター利用の小例会（東部・都心・十条等）が、地域に根ざした活動が行われた。

4.都下ブロック（空白地域）で例会設定がなされ、その多くが成功した。

5.「ゆうぽうと」例会で中央と南部地域の共同例会に前進が見られた。

問題点

1.地域中心（ブロック）の活動が優先され、中央例会への関心か弱まった。

2.委員の減少傾向が続き、活動家育成の活動が遅れている。

3.中央例会への取り組みが弱い。運営委員会が、全体活動（第九・平和例会）への役割を果たしてない。

東京文化会館を拠点とした、ラザールベルマン（P）辻久子（V）宮沢明子（P）MEグスマン（G）ナタリアツルーリ（P）長谷川陽子（C）等の企画をした。東京労音初出演の長谷川陽子は、若々しく新鮮味のある演奏で成功を収めたが、全体的には苦しい取り組みとなった。新しい企画として、東部や都下ブロックが取り組んだ企画「音楽の楽しみ」は、評論家の長谷川武久氏による楽器の説明や曲の解説、そして氏推薦の若手アーチストを取り上げ、「クラシックの面白さ」「クラシックの良さ」を認識させる例会になった。「藍と平和のコンサート」（労音合唱団・バラライカアンサンブル・井上頼豊・和波孝禧）は、生演奏と語りで平和の尊さを伝え、親子連れにも拘らずステージに集中した高評価の例会でしたが、組織的には今後に課題を残した。

第九の取り組みは、昨年並みの合唱者が組織され、豊かな練習の積み重ねで、2回のコンサートを取り組む。（東京芸術劇場、東京文化会館）初めて使用した芸術劇場は満席にしたが、東京文化会館は合唱団を援助しきれなかった運営機関の弱点もあり、満席にならなかった。内容は指揮の小林研一郎の評価も高く、昨年と同じソリストで高評価の演奏会になった。バレェの企画は、「マヤプリセツカヤと仲間たち」を5回、「シャイヨの狂女」（新作バレェ）を3回、「モスクワクラシックバレェ」を10回取り組んだ。全体的に組織が伸びず、大きな課題を残した。

ポピュラー例会の企画は、大小会場を合わせて29種目48回の例会。会場規模別では500席以下13回、500～1200席9回、2000席以上27回。ジャンル別、邦人ポップス22回、外人ポップス3回、フォーク10回、ラテン4回、その他8回。安定した組織で高評価の例会は「布施明」「菅原洋一」「由紀さおり・安田祥子」「森山良子」「さとう宗幸」「美輪明宏」「高石ともや」等が上げられる。

伝統音楽の取り組みは「高橋竹山」7回、「高橋竹与」4回、「寄席」6回、民族楽団「花咲座」3回、他に野村狂言や群馬中芸が取り組まれる。海外招聘の民族アンサンブル、「カラゴト」6回、「ダゲスタン」4回の公演が取り組まれた。

各ブロック労音の現状と特徴

・本部ブロック

中央例会として、33種目46ステージ、R's アートコート企画4種目9例会を取り組んだ。本部は、PC管理機能や対外関係が集中しており、実務処理に追われ組織活動が出来なかった。併せてブロックの独算化で中央例会に対する取り組みが不十分になった。

・西部ブロック

世田谷区役所サークルを中心に、3回のブロック例会を取り組む。ブロック内他区や民主団体への例会ニュースを届ける活動を継続させている。

・都心ブロック

民族アンサンブル「カラゴト」を本部と合同で4回行なったが、不十分が克服できていない。センター例会を4回開催。

・東部ブロック

足立・葛飾・墨田の3区は地域委員会が独立して固定会員制度を導入し、サークル例会等の活動を展開。落語・フォーク・大道芸・民族音楽教室「たみの会」が地域の催しやサークル例会に出演（102回）し、地域や友好団体との関係を大きく前進させている。センター開設以来地元との繋がりが強められ、地域からのセンター利用が増えている。足立文化会館の廃館で、小例会2回設定で回数が増え、力量の関係で1回1回の例会への不十分さが生まれ、担い手を増やす課題が生ま

れている。

・南部ブロック

「狂言」「高石ともや」「ダゲスタン」「森山良子」を取り組む。森山良子は、本部との共同例会で昨年より組織数を増やした。他の例会も、会場の近さが好評で、地域例会への期待が寄せられている。しかし、組織低下があり、財政的に厳しい状態が生まれている。

・城北ブロック

８回の例会（内２回はバレェを府中センターと共催）を取り組む。「北とぴあ」の会場例会も定着してきている。固定会員が少なく外的宣伝に頼っている状態、今後の課題として工夫が必要。センター例会は十条合唱団の定期演奏会が行われている。

・北部ブロック

「カラゴト」「高橋竹山」「を取り組んだが、厳しい一年だった。

・都下ブロック

２５回の例会と２回のコンサート協力を行った。多くは成功したがいくつかの例会が目標を下回った。会員数は。年間４００名固定１７０名で、目標の５００名を達成。三多摩全体を視野に入れ、協力団体・生協・互助会・共済会等幅広く協力関係を広げ、地元のミニコミ誌や新聞に掲載でき、開設３年で地元の音楽団体として認められるようになった。

・東葛ブロック

センター開設以来、地域に労音を浸透させ、年７回の例会と４回の落語会を企画し、一つ一つ確実に成功させてきた。「南京玉すだれ教室」「太鼓・民謡教室」を開校し、落語会や地域の催しで成果を発表している。東葛固定会員１６８名、東京労音会員２８０名の計４４８名を擁し、責任者も決まった。

演奏サークルの活動

・アコーディオン研究会

１３名の会員で毎週―十条センターにて練習。関東アコーディオン演奏交流会で出演、東京消費者まつりに演奏出演、うたごえ祭典に参加、アコーディオン全国合同演奏に出場。現在創立３０周年記念コンサートに向け準備中。

・ギターサークル六弦会

鈴木巌氏の指導の下、労音ギター教室卒業生により創立、３３年になる。現在まで５００人の会員を送り出し、プロのギターリストも誕生している。２５周年記念演奏会の時に生まれた。０Ｂギターアンサンブルが生まれ、第一回演奏会を十条会館で、創立３０周年演奏会は労音大久保会館で開催。

・民族音楽教室・研究会

働きながら民族音楽を楽しみ、文化の創造に関与する重要さを理解する、民研はアマチュアリズムを原点としたサークルであることを認識。春には城北ブロック例会「響け太鼓・海原を超えて」を取り組み、夏には「笛太鼓柿特別講座」、他にも上の東照宮で「演奏会・盆踊り・太鼓出前演奏」を取り組む。残念なことに民研創立以来の仲間０氏の追悼演奏会を、大谷バレェ団・こぶし座と計画をしている。

・労音合唱団

今年は「イタリア音楽紀行」「愛と平和コンサート」¥労音大学」「第九コンサート」等に参加。結団３０年を迎え東京文化会館で記念演奏会、記念パーティを取り組んだ。

・車人形教室

この年は人形制作を主として位置づけ、現存の６体から倍の制作を目指したが、時間と参加者の減少で翌年持ち越しとなって知った。春に北とぴあ「さんしょう大夫」夏に城北例会ん「まんざい」に出演、秋には姫路の花こま「さんしょう大夫」に協力交流を行う。

交流会関係

・労音大学

第１３回労音大学は、カンダパンセ（旧労音会館）で開催。全国から２２団体４０２名の参加があった。記念講演には、美輪明宏やマルセ太郎を迎え、戦争体験や憲法問題等が、笑いと涙を交えた感動の講演となった。記念演奏会では、薗田憲一とデキシーキングス・富井多恵子・李陽雨が熱気溢れるステージを、その他橋本のぶよや山本さとしが駆けつけた。労音運動のすばらしさを再認識した大交流会となった。

・スキー友好祭

山形の蔵王スキー場に１０８名が参加し開催、参加者の減少傾向と高齢化の問題点が挙げられた。

・東京労音交流会

「夏の友好祭」を翌年に開催するため、各ブロックからの代表で実行委員会を作り準備を進める。その一環として、春に新設の「ギター文化館」で交流会を開催、２９名が参加。「楽市楽座」の奥野氏から公演を得た後、分散会で深めた、翌日には筑波山の登山をし、交流を深める。

・原水額禁止世界大会に参加

東京労音として、１２名の代表が世界大会に参加。この取り組みは着実に前進し、東部ブロックでは、派遣かカンパや千波鶴を折り大会に持参、

参加報告会も開き成功を収める。

・「財団労音会館」

助成金を通じて、東京労音や全国の労音運動に貢献。全国の共同企画、海外招聘企画「レオン・ヒエコ」「カラゴト」「ナタリア・トルーリ」「ダゲスタン」「チモフェーエワ」等に助成を行う。全国で73労音が企画に取り組み成果を上げる。前年完成したギター文化館（八郷町）は、世界で初めてのギター博物館として、マスコミにも大きく取り挙げられ、ギター関係者や愛好家の間で好評を博している。土・日のみに一般公開をしている。この建物を世間的に認知させる目的も含めて、コロンブス大陸発見500年を記念して、一年かけてイスパニダ音楽祭を挙行（国際ギター文化交流協会＝ICG）。内外のギター等を中心とした演奏家を数多く招聘。然し計画と運営の不十分さが露呈し、多額の赤字を生じ今後の課題になった。

・全国労音の動き

静岡県の伊豆長岡で、46団体98名が参加し全国会議が開催された。継続鑑賞会員制度、サークルからの運営参加、共同企画の重要性について討議。全国労音としてPK0法案に反対声明を確認。全国の会員数は40080名となる。

つづく

石岡市指定文化財（二十六）

兼平智惠子

現在石岡市ふるさと歴史館（石岡市立石岡小学校地内）では第二十二回企画展「身近な文化財」と題して石岡市寄贈資料展を行っています。

江戸後期から昭和初期の八郷地区、旧石岡地区皆様の日々の暮らしの中で愛用されたもの、愛読されたもの等紹介されています。

ちょっと覗いて見ましょう

明治四十一年に発行された雑誌『流行第5年3月号』

の中、「服装のコラム」欄では　まだまだ洋服は珍しい存在だった事、「化粧のコラム」では「目をパッチリする法」や「書き眉にて自然の如く見せる法」など興味をそそります。

ここで書き眉について私からのおすすめ、赤く紅ささずとも、歳と共に薄くなってきた眉をしっかりと書く事によって五歳若く見えるはずです！お化粧面倒がりやさん、是非お試し下さいませ！

お嫁入り道具の一つとされていたミシンの展示。江戸時代後期のレシピ本、おもてなし料理の紹介。かつては自宅で冠婚葬祭を行うことが普通でした、地区の共有品として、結婚式や葬儀を行う家で使用された上品な食器が展示されています。

続いて家の運気を決める家相学です。

南向きの門が最高で、西向きは財産に乏しくなるそうです。ただし、道や隣家などの周辺環境によって運気は変わるとのことです。等々

その他、少し昔の日常の楽しみかたや江戸時代の八郷地区の寄贈資料からの八郷地区の医療は……。

どうぞ市民の皆さんから寄贈された昔の道具類や古文書、古書籍等の資料からの身近な石岡の歴史をお楽しみください。

石岡市ふるさと歴史館（石岡小学校地内）

令和二年七月一日（水）～十月四日（日）

午前十時～午後四時三〇分

月曜休館（祝日の場合翌日）　入館無料

今回の文化財紹介に入ります。

常陸府中藩主松平家墓所

石岡市府中二―四（照光寺）

史　跡

昭五三・八・二三　指　定

元禄十三年（一七〇〇）の九月、江戸小石川の水戸徳川家上屋敷を訪れた第五代将軍徳川綱吉は、時の水戸藩主・徳川綱條（つなえだ）の叔父にあたる松平頼隆（水戸徳川家二代藩主徳川光圀の弟）に二万石を与え、大名に取り立てました。

この時頼隆に与えられた所領は、陸奥国岩瀬郡長沼十八ヶ村と常陸国の行方郡九ヶ村、茨城郡三ヶ村、そして今の石岡地域を含む新治郡府中七ヶ村。これにより現在の中心市街地を含む地域は府中松平藩の支配を受けることになりました。

こうして近世の府中（現石岡）の町は慶長期（一五九六～一六一五）には都市形成が進み、寛永期（一六二四～一六四四）には、すでに水戸街道に沿う宿場として大きな発展を遂げていたといわれている。

府中松平家は水戸徳川家と同様に定府（じょうふ・参勤交代を行わず江戸に定住）と定められ、代々の藩主は江戸に居住し、従って藩士の大部分も江戸に住みました。藩士の数は宝暦二年（一七五二）で一五〇名余り、明治維新当時で約二〇〇名でした。

そして府中の町には、松平家の居城や屋敷は作られることはありませんでした。
江戸時代に代官その他の役人が在任した屋敷や役宅は、陣屋あるいは陣屋敷とよばれていました。府中には、現在の石岡小学校の敷地一帯に「陣屋」と呼ばれる役所が置かれ、郡奉行以下、手代（てだい）、足軽、中間（ちゅうげん）、門番など、総勢二十余名が民政を担っていました。
初代頼隆（よりたか）―頼如（よりゆき）―頼明（よりあきら）―頼永（よりなか）―頼幸（よりとみ）―頼済（よりすみ）―頼前（よりさき）―頼説（よりひさ）―頼縄（よりつぐ）―頼策（よりふみ）　と代々播磨守を世襲し、十代目の頼策の時、明治維新を迎えました。
明治二年、府中藩は諸藩と同様、版籍奉還を行い藩名も石岡藩と改めました。これに続き十代目府中藩主・松平頼策は新政府から藩知事に任命され、藩士と共に在所である府中へ引き揚げました。
手塚邦彦「ご一新のころ」によりますと「殿様（頼策）は今の小学校の所にあった御殿にお住まいになりました。一年ぐらいはおいでだったでしょう」とのことなので頼策は大名駕籠で陣屋門をくぐり、陣屋に入り一定期間府中に住んだ初めての松平家当主と言えますが、明治四年七月に行われた廃藩置県によって石岡藩知事を免じられ、旧藩主は東京への移住を命じられた為、頼策の府中滞在は終わりを告げました。府中を去る日、頼策お殿様はどんな事を思ったのでしょうか……。
　歴代藩主の墓地は小石川宗慶寺にありましたが、大正一五年（一九二六）、土橋通りにあります照光寺に移されました。
本堂の西側奥、鳥居のある所を目指してみて下さい。真ん中に歴代松平家の墓、左側に十代藩主で藩知事を勤めました従四位子爵松平頼策の墓、右側に九代目正四位松平頼縄の墓、お墓には珍しい鳥居の奥に毅然としたお殿様がたがいらっしゃるように感じられます。

参考資料　石岡市ふるさと歴史館
　企画展記録集１（第１～10.回）
※同歴史館内で販売しています

○大丈夫　と軽く見ないで　コロナ
　　智惠子

玉里のよいとこ見つけた　１　伊東弓子

　コロナ、コロナの恐怖に、各種の活動をやめたり、思案に苦労している。ダイヤモンド筑波を見る集いが中止になっている。何で形を変えてやらないのかと思ったりしたが、御留川を歩く会では私らなりに“地元のよいとこ見つけ出す”工夫をしなければと思い、知恵を絞り出して筑波と夕陽を各々に見てもらった。
　今回“玉里と棚田”と呼んで、大分前から親しんでいた場所を自分だけのものに止めず、この際みんなに紹介しようと決めた。決めると時機を逃すと大変だと、すぐ計画に入った。それと一緒に近くの“ホ・ト・メの会”の活動や部室貝塚の紹介も出来るとばかり、一人心弾ませていた。ホトメの会の会長さんに話し会の協力を依頼し、近くの施設の責任者の方達にも車、駐車の件などの事で手配し、準備の欠けがないようにすすめた。急な中でのお知らせは間に合わず、前日夕方まで忙しく走り廻った。
　この辺一帯、戦前は高崎上川岸の土地、そこの旦那さまがあちこちへ行く度に、珍しい植物・木々を取り寄せて、試験的にいろいろ植えて育てていたらしい。今でも当時の話しが残っている。下見をしている私の目に、今の世のコロナのことも知ってか知らずか稲穂が揺れている景色が写った。棚田も傾斜が急ではないので“田毎の月”“田毎の日”は見られないかなと、いつも心にかけながら通っていたが、本腰を入れてみよう。
　お話し会の当日は、ホ・ト・メの会から六～七人、御留川を歩く会からも六～七人という参加だった。人数の多い少ないではなく活動しあう会と会の交流は意義のある事だと、改めて思った。お互いの会の成り立ち、活動の内容を知り合う、会員同志がお互いを深め合う、輪が広がっていく、そこに大きな意義があると思う。水辺を歩いて草・木・虫を見ていく。山林の方も立木を間伐し、下草を刈って陽が射してきて山百合も木々から射す太陽のスポットライトを浴びて、やがて山の主役になろうとしている。草々の動きや、風のさや

ぎを感じながら歩いて行く。この作業を続けている人の善意も無視して花を取ったり荒らしていく人もいるとか、残念な話も聞いた。ひと歩きして東屋で休息し、ホ・ト・メの会の活動を聞いた。話しの端々から研究心のある人たちが、作業活動を大切にしている人たちだったことをあらためて思った。お茶の用意もすっかり忘れていたが、ホ・ト・メの会の方からご馳走になった。御留川を歩く会の方で個人的にチョコ、飴を用意してくれた人がいて喉の渇きを潤せた。年老いて卑しくなったせいか、小さな一粒一粒と茶の美味しさは有難かった。お喋りの後、ハーモニカの伴奏で懐かしい歌の数々を唱った。若い頃の歌、その一曲一曲は永遠に素晴らしく思える一曲一曲だった。体中が騒ぎ出す、若さを取り戻したひと時だった。私達の活動の一つとして、これからも取り組みたいとも思った。

時間の取り方が一寸ずれたか、遅れたようにも思い坂を登った。田の持ち主の人が待っている事だろう。緩やかな曲がり道、木立の茂み、昔のままの道をあるいていった。この道は若い時、先輩の人（未亡人会の人）達と石岡からの帰り道で通ったのをはっきり覚えている。当時戦争でご主人を亡くしたお母さん達五～六人と石岡での集りに行って、新高浜で降り、歩いてきた道だった。高崎・上玉里のお母さん達だった。今はもうお一人もいらっしゃらない。

田の持ち主であったＩさんの案内で、道沿いの右下の田に目をやった。陽を受け、水の中で確り根を張った姿、これから暑さ・風・雨に打たれて秋を迎えるまで頑張って欲しいと願うばかりだ。地元、知り合いの多い中で、一見したところ大人しい感じのＩさんのお父さんが中心になり、弟さん達とこの地で協力して生活してきた姿がつながりの中、感じられた。世代が変わっても先代や従兄弟、血筋のつながりを大切にしてきた家族だと思えた。新宅した家の子供達が学校へ行く前にお爺ちゃんの家に挨拶に行くそうだ。近所の人達が「よく出来た人たちだよね」と、語ってくれたのを前に耳にして覚えている。又もう一軒の分家も、家屋敷・山林などとても丁寧に管理している。歩きながら木一本一本が開拓した当時の苦労を伝えているように思えた。実をつけている木も秋には実り、紅葉して彩られることだろう。

谷津田の向こう南の方に部室貝塚の台地があったのに詳しい説明を忘れていた。

ホ・ト・メの会とは、ほたる、とんぼ、めだかが棲むような所を作ろうという願いで始められた会であった。子供の数が少なくなったことが淋しい限りだそうだ。どこでもみられる状況だが、会の人達はめげずに頑張っている姿と強い意気を感じ、頭の下がる思いで分かれた。秋には黄金の波うつであろう、ここを又訪れたいと思う。

コロナ、コロナに怯えることなく、自然を大切にする仲間同志、自分たちは自然の一部の存在であることを確り意識して交流は大切にしていきたい・・・と、あらためて思った集いだった。

棚田。玉里の何ヶ所かで見たことを思い出した。一ヶ所は、幼い頃から二十代の頃だった。寺の南側の下り坂の所だった。西光院という寺跡。地名も残っている辺りに弁天池から流れ浸み込んでくる水が、小さな田を作っていた。そこより少しずつ低くなって五～六枚程の小さい田があった。田の傍らには、田と並んで細長い小さな畑があって、これ又育つのが止まったかと思うようないじけた柿の木が五～六本あった。実をつけたのを見た覚えがない。その小さな田にも春には早苗が植えられ、秋には実っていた。二十代中ごろには田の畔は残っていたが、稲の姿はなく草々に変っていた。遠い昔の西光院跡地の風景も様変わり、竹が忍び寄ってきている。あの小さな棚田を大切にしてきたのは、誰だったのだろう。尋ねることもなく過ぎてしまったのは残念だった。棚田の上の木立は墓地と化したのだから水も枯れたのだろう。

二ヶ所めは、青年時代から働き盛りの頃だった。大宮神社から府中へ行く通りの途中、左に内田宅の稲荷の大きな森がある。右に下ったところだ。外山、亀塚へ行く道沿いの左側に六～七枚ちょっと大きな田が、昔のことを映すかのように水を貯えていた。友達の兄さんが耕し、苗を植え、稲刈りをしていた。私らは手伝うこともなく“ごしょうばんにあずかろう”と言って、お茶をいただいた。まだ人力中心の農作業、やがて機械化され、手のかかる小さな所は見捨てられていった。お兄さんも亡くなった。野良へ働きに行く人の足音も消えた。草々や小木が隠してしまった。

三ヶ所めは、ついこの間まで作られていた。遠い昔の市海道の下に畑が続く、その間に湿地帯が細く続いていた。上の台地の山林から浸みていた所だろう。家の近くまで六～七枚位、本当に小さな田があった。Ｓさんのお爺さんが面倒みていた。春になると水が流れ、水が小さな田一枚一枚に溜まり、田植えもした。お婆さんや家族は、植え上げ餅をつくってあげたろうか。あそこからどの位のお米がとれたろう。そんな事は問題じゃない。お爺さんはその場を大切にしていたのだろう。お

だにかけられた稲束から良い香りがした。もう七～八年になるか。お爺ちゃんの姿がなくなると共に、小さな棚田の姿も消え、畑というか草の間を水が浸みてくる。

人がいなくなると、その人に替わることは出来ないのだと、あらためて思い、時代が変わると必要でなければ消えてしまうものかと、熟考えさせられた。“よく見ておく”“よく聞いておく”こと必要だと。棚田を通して思うが、生命ある限りそれを伝えたい。

コロナの中で、人と話さない。人の話しに耳を傾けない。人と喜び悲しみ合わない。今後、その子たちは、どんな世界で成長していくのだろう。

田の道を行くと、お米の香りがする。

“玉里の棚田”の実りの秋に会いにいこう。

トカラ列島

小林幸枝

鹿児島の南にトカラ列島という諸島があります。トカラ列島は有人島７つ、無人島５つの12島から成り、南北に約１６０㎞あります。全島が十島村（としまむら）で、常時人が住む島としては「日本一長い村」です。

“日本最後の秘境”と呼ばれ、唯一の足である週２便の村営フェリーが島をつないでいます。でもこのフェリーも予定通り出ない時もあるようです。その名も「吐噶喇列島」と書き、この名前も謎いっぱいで、まったくこの未知の世界に是非行きたくなります。またこの列島は火山も多く、諏訪之瀬島は、今でも噴煙が上がっています。

有人島は、口之島、中之島、平島、諏訪之瀬島、悪石島、小宝島、宝島の７つ島。無人島は、臥蛇島、小臥蛇島、小島、上ノ根島、横当島の５つ島。

この列島に行きたくて、今年行く予定でしたが、コロナ感染拡大の為に行けなくなりました。コロナ感染が終息し、落ち着いてから行きたいと思います。そのときは、また紹介します。待ち遠いけれども、その時を楽しみにしています。

〈父のこと　２４〉

菊地孝夫

〔番外編、再び〕

どうも原稿を書くのが億劫になっている。その原因は、暑さと、コロナの暗いニュースばっかりの所為だろう。

こんにちの様な、変化の激しい時代には、月報という形式は聊か、そぐわないのかも知れない。

それでも、ここに書き留められた事が、はっきりとした形で残っていくという事が一つの「意義ある事」ではないかと考えている。

ここにきて、景気は回復しているという報道がなされている。コロナによる企業のダメージも思ったよりも少ないといっているところもある。

これが本当ならば、誠に喜ばしい限りです。

梅雨の晴れ間にミンミン蝉の鳴き声が聞こえてきた。今年の梅雨は長く続いている。去年も、同じように７月末ごろ梅雨が明けている。去年は途端に猛烈に熱くなった。去年と違うのは、「日照時間」が圧倒的に少なかったという事か。ＳＯの影響で、農作物が採れなくなり、大幅に値上がりした。農業県だというのに。

今日は〔７月１４日〕、ヒグラシの鳴き声を聞いた。ヒグラシは、夏の終わりを告げて鳴くんだと思っていた。

今年の夏は短く終わってしまうのだろうか？

８月に入り、夜になると、秋の虫のすだく声が聞こえるようになった。

昆虫の動態や生態は、われわれ人間に自然界の気付かないような動きを教えてくれる。それはとても優れたセンサーと言える。

新型コロナの影響で、そこら中、あちらこちらで閉まっている店や公共的なところが多くて、行くところがなくなってしまった。ひところは、国道を行きかう車両の台数も少なかった。

遂にはこの石岡市でも感染者が出たという事で、近くのスピーカーからは連日のように、

「コロナに気を付けましょう・・・」
とのアナウンスが流れる。
一体、何を。どう気を付ければいいというのでありましょうか？
具体的に教えてください。

学校の閉鎖、ソーシャルディスタンス。マスクの着用。「三密」を避ける。手洗い、消毒。店舗の閉鎖、営業時間の短縮。或いは、夏休み需要を見込んだ、ＧｏＴｏ・トラベルキャンペーン。
（ＧｏＴｏ・トラブルという声もある。）

これまでいろいろと取られてきた対策は、ことごとく無効だったという事実が、ここにきてはっきりと分かってしまった。

それでもなお懲りずに、「アフター・コロナ」などと言っている人達がいる。
まだコロナは収束の気配も、有効なワクチンも只のひとつも出来てはいませんよ。

この流行が収まったあとのことを考えておくのも大切だけれど、それを軽々しくいま口にするのは早計だろうし、その姿勢は、明らかに間違っている。
もし、急速に収束して、これまでのことがなかったかのようになったら・・・
いろいろ悪口を書いてきた、著者は、この誌上で、お詫びするしかないですね。

〔花も嵐も〕

台風シーズンに入って、強風が吹き荒れることもある。せっかく綺麗に咲いていた花も一夜にして吹き飛ばされたりする。
東日本大震災の時、三陸沿岸を中心に、巨大な津波が襲った。
ヒット曲を連発している人気グループのサザン・オールスターズの「ＴＨＵＮＡＭＩ」という題名の楽曲は、お蔵入りとなった。
「大災害が起きているさなか、「津波」という歌なぜ歌っていてもよいものか」というのが理由の自粛だろう。
人目を引けばいいからと、安易に題名を考えたり、楽曲の歌詞を造ったり、グループの名前を名付けたりしているが、果たしてそれでいいのかな？
わたしは、こうして文章を書いているときには、そういった配慮はしている。それが、最低限のルールだと考えているからにほかならない。
それすらできない人たちは、公に発言すべきではないというのが、筆者の変らない考えです。
（もしかしてこれは、差別や、いわれなき誹謗中傷にあたるのでしょうか？）

〔愛読者〕

先日、会報を欠かさず読んでいただいている方々のお話を聞く機会がありました。
書くほうのがわの一人としては、まことに有り難いことです。
実際の反応というのは、なかなか耳にする機会がありませんからね。

〔素朴な疑問〕

テレビの教育番組で、どこかの大学の客員教授が日本の古代史をやっていて、それを見乍ら、ふと思った。
大化の改新と言えば、かの聖徳太子である。あれほど有能で、才知も人望もあったというのに、何故、天皇になれなかったのだろうか？と。
馬厩皇子（うまやどのおうじ）との別名もあったし、系図を見ても、皇族の一員であるから、当然のこと、皇位継承権はあったはずだと思うのだが。誰か教えてくれませんか？

〔ずっと昔の話〕

日露戦史上有名な、旅順港要塞の攻防戦は、１９０４年８月１９日から始まって、第１次攻撃と、第２次攻撃があったらしい。夏真っ盛りの時、さぞ暑かったでしょう。
（以下は半藤一利氏の「日露戦争」全３巻からの引用が主である。）
２度にわたる総攻撃が終わった時点での両軍の将兵の損害を比較してみると、
日本側・・・戦死、１５，４００人。戦傷、４４、０００人以上。総計、５９、４００人以上。
それに対して、
ロシア側・・・総計、　１，５００人あまり。

損害の大きさからして果たして勝ったのは、日・露どちらだったのだろうか？
半藤氏の物足りない所は、モスクワ大学など、ロシア側の一級資料を直接当っていないところ。

だから、ロシア側の数字も、総計だけに留まり、正確な比較ができない。

〔近頃、嬉しかったこと〕

蝶々のことを調べに行った石岡市の児童図書館で、フランスの昆虫学者、「アンリ・ファーブル」の伝記をぱらぱらめくっていたら、まえがきに、生年月日が載っていて、それが、１２月２１日だった。しかも、生い立ちが、３歳から６歳まで事情があって、祖父母に預けられていたという。

筆者と同じ境遇だったという共通点を見つけ、欣喜雀躍（きんきじゃくやく）、将に躍り上がりたい心境になった。

小学生のころから、大ファンだったのに、その生年月日も知らなかった（恥）。

しかし、その日は一日中、近年にないとても幸せな気分だった。

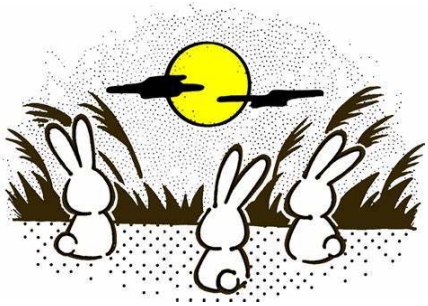
集英社「ファーブル昆虫記」全８巻
副題：虫の詩人の生涯
奥本大三郎　著

奥本氏はフランス文学者であり、昆虫好きでも有名です。多数の著作があります。

奥本さんの生まれた日は、奇しくも「啓蟄」。なんという偶然の暗号か。

後ろの参考文献の中には、「日高敏孝」さんの名前もあります。日高さんの名前を知らない人はいないと思いますが、「ファーブルって誰？」という人に複数会って、唖然としている日々です。

私の常識は、世間の非常識？



風と共に　《理》　大輪啓展

伍　哲学（２）

先月からの続きです。

梅雨の季節も終わりを迎え、突き刺すような日差しがこれでもかと言うように、夏の季節を主張しているこの頃ですが、コロナ対策としてのマスクやフェイスシールド等における、体調の管理が難しいと日々頭を悩ませています。

皆様も熱中症、日射病、コロナ対策、万全の備えを日々心掛けているかと存じます。

如何に一人一人が意識的に物事の本質を捉えるかが、最重要ポイントとなっていくことでしょう。

さて、前回に引き続きまして【絆】について、前月におきましては、犯罪心理であったり、物事の考え方に対する独自の目線からお話させて頂きました、今回は少し趣向を変えまして、親子に対する絆を私目線で分析していきたいと思います。

昨今における親子の絆は、一昔前に比べ如何様に変化しているでしょうか。

私自身の周りの状況だけでも、ガラリと変わっている様に思います。

とても繊細な部分ではありますが、先ずは体罰と言う名の躾について、

一言で申しますと、私は必要であると考えています。

当然行き過ぎたものは言語道断ですが、適度な体罰はあって然るべきかと、何故かと問われれば、この様に答えます。

殴る側、殴られる側も同様に痛い思いをするからだと。

子供は、悪い事をすれば痛い思いをする、これも一つの教育方法と言って良いのではないでしょうか。勿論それだけではいけません。

叩く行為が主となってはならないからです。

どの様にすべきなのか、それは諭す事を必ずセットにしなければ意味が無いという事です。

私自身も偉そうな事は言えませんが、確実に必要だと感じます。

何故自分は怒られたのか、どの様にする事が良かったのか、次からは如何すべきなのか、今回してしまった事への償いは、ここまでが１つとして考え無ければならないと、そう思うわけです。

初めから、諭すだけで理解する子もいるでしょう。一様に同じ教育をしても必ずしも上手くいくと言うことではありませんから、子供の教育だけではありませんが、知らない事を正しく教えるには、根拠と自信を持っているという事は、指導する側の最低条件の様に思います。

脱線しましたが、昔は良く近所のおじさんおばさんが目を光らせ、悪い子供へ叱り付け・諭し、そこから未熟な親達は少しずつ成長し、その中から近所付き合いがあったり、助け合いの地域社会が出来ていたはずが、今となっては子供を怒れない・躾けられない親たちが、適当な子育てをして、加減の出来ない親を親とも思わない様な舐めた態度を取らせている、そんな現代へと大きく移り変わってしまったのではないかと、その様に思います。

子が親を、親が子を手に掛けてしまう様なそんな世の中では生きる楽しみも無いではないですか。

全ての人々が必ずしも上手く事が進むとは限りませんが、親は子を、子は親を想って、お互いを尊重しながら慈しみ合い、助け合い、少しずつでも優しい気持ちを持って、それが世の中へ伝播して、そんな現代へと移り変わるのが、LOVE&PEACEですよね。

学習する事を忘れず、奢らず世の中を良く見ること、優しい気持ちで誰かに接する事、そんな何気ない日常から、絆は生まれていくのではないでしょうか。

ハーフ、クォーター、片親、親無し、施設、離婚、再婚と、多様な人生がある中で、共通しているのは、生きているという事です。

そこだけでも、皆仲間です。

他人を否定するのではなく、受容する事からはじめていきましょう。

自分と違うからと弾くのでは無く、どこがどう違いどんな良い所・自分の知らない事を知っているのか、そんな事から興味を持って、優しい気持ちで絆を育んで行きましょう。

きっとそこには、自身にとって掛け替えの無い相手がいるのかもしれません。

そんな可能性すら潰す事なく、未知との遭遇していきましょう。

今回は親と子の絆について、次回は友人その他についてをテーマとします。

この続きは、次月とさせて頂きます。

内容は全て私の主観です。

【風の談話室】

《読者投稿》

やさと暮らし（43）　　さと女

今年の梅雨明けは８月に入ってから、コロナ禍も含めて世の中が狂ってきた、今は連日の猛暑で・・・。此れも、今まで地球を痛めてきた報いか？

・梅雨明けが待たれるが、今日も降ったりやんだり、湿気がすごい。夫は池通い、手長エビが可愛いいね、と、リクエストしたら仕掛けに工夫していた。そして、同じ部落の中にある、歩いて５分ほどの池にメダカの仕掛けを、ここの池は山からの水が入っている。時折子供たちが釣りをしているのを見かける。絶対メダカがいるだろうと仕掛け、往復すること数回。２回目15匹、３回目５匹、フナ２匹かかっていた。手長エビは５匹になった。夕方近所の御夫婦が遊びに来て暫し、水槽の前で魚の話で盛り上がった。

・８月に入り、久しぶりにカラッとした青空、思いっきり布団を干した。庭や畑は、長雨のおかげで、伸び放題の草草。畑をグルッと一回り・・・６ヶ所も、イノシシが無惨に掘り起こした穴があった。あぁぁ、とうとうやってきたか、作物の被害は今の所ないが、たくさんのゆり根がやられた。

・長梅雨の７月には、つぎつぎと咲いて楽しませてくれたハマユウの大株。連日の猛暑のなか、株周りを奇麗にしようと畑に行ってみると、なんと？？？真っ白い花を咲かせていた。ピンク色の株は花を咲かせる気配もない。我が家のハマユウは、ユリの花に似ている。その隣に咲いていたのは、これも６月に咲いていた八重のホタルブクロ、少し小ぶりだが再び花を咲かせていた、何とも可愛い。暑い中、少し涼しい気分になった。

・今日も暑かった・・・。デレデレの1日を送ってしまい、ちょっと反省。それでも夕方には恒例の散歩。5キロ程歩きいい汗をかく、途中の池で釣りをしている小学生に会い、声をかけるとバケツの中の魚を見せてくれた。大きな鯉が釣れていた、因みに夫は、家の前の小さな流れでドジョウを10匹ぐらいとっていた。もう、入れる水槽が無いよ・・・？

・連日続く猛暑・酷暑、きょうも8時には、室温31度も・・・。お盆の入りなので、これから盆花を買いに行き、午後からお墓参りで、亡き父母をお迎えに・・・。我が家の玄関先で、さぎ草が涼しげに咲いており、両親をお迎えしている。

・突然の牧場の閉鎖、今朝から大型の動物移送車が何台もやってきた。隣の牧場が突然の廃業、牛舎の牛たちを運んで行きます。牛舎の主人が体調を壊し、子供たちも後を継がないとか・・・。またまた八郷の“牛やさん”の廃業で、残り数件になってしまったとか？時代ですか？なんか悲しいなぁ・・・。

・知人から、畑でうりがすごいんだけど、食べるのを手伝ってくれる・・・。電話があり、さっそく頂きに行った。いくらでもあっから持って行ってくれ、と言われてもそうそう食べられるものでもない。が、この時期、軽く塩もみなどするとさっぱりして美味しい。塩漬けにでもするといいよと言われ沢山貰ってきた。さっそく、漬物たるに漬けてみた。

熱い日々

燕　石（えんせき）

夏が暑いのは当たり前のことだけど、今年はウイルスの所為で尚更熱い。

暦の上では立秋を過ぎている。旧暦は、もともと中国の太陰暦を持ってきたものなので、季節の移り変わりは経度の関係で日本とは違っているので、日にち的にずれがあります。

例えば沿岸を台風が襲ってきても、大陸の奥深くまでは被害を及ぼすことはない。そういった大陸性気候とも違っているから、受ける感覚も違って当たり前と言える。

今年は長雨が続いたので、ようやく聞こえ出した蝉の声も、あっという間に聞こえなくなって、短い夏になるかもしれない。

心なしか、セミの声が例年より少ないと感じているのは、筆者だけだろうか？

もう、秋の虫が鳴きだしている。

暑さに文句を言ってもしょうがないが、コロナ対策の為に換気をしようとして窓を開ければ、熱気が襲ってくる。

毎度のコロナ話にも飽きてきたので、ほかの笑える話を、と思っても生憎見当たらない。

〔七色の虹〕

ちょっとだけ、パチンコの話におつきあいください。

東京・大阪などでは、レインボウ・ブリッジに合わせたのかどうか知らないが、コロナ対策をした店には、レインボウをデザインしたステッカーを張るという。

パチンコをやっている人は知っているだろうけれど、大当たりの確率は、「白色」「青色」「赤色」「金色」「レインボウ（虹の7色）」の順番に高くなる。

私の体験では「レインボウ」はほぼ百パーセント大当たりだ。

都庁や、大阪府庁が、赤や青に光った時、テレビのニュースを見ていて思わず大笑いしてしまった。止めは、レインボウである。

その後数日経たずに、収まったはずの感染が前より倍する勢いをもって拡大してしまったというのはたちのわるい、悪い冗談です。

当事者たちには笑いごとではないだろうが、この見通しの甘さというか、安直さには、呆れてしまう。

「アマビエ」だか「アマエビ」だか知らないが、妙チクリンなママスコットを見つけ出してきて、過去の疫病の時使われたおまじないの物だとかいう。

筆者のアンテナには、一度も登場しなかったものだ。意匠デザイン的に見ても、ちっともよくない。不気味な化け物だ。こんなものを崇め奉って、いったいどうするんだ？

百兆円をはるかに超える莫大な国家予算を使いながら、やっていることは児戯に等しい。

鼻高々でもって記者会見を開くが、しょっちゅう言い間違いをしてしまう。或いは、翌日、みっともない謝罪会見をする。

こんな時間の無駄遣いはやめてしまって、あら

かじめ「録画編集」したものを公開すればいいノニと思う。マスコミ各社も、大半はどうでもいい質問しかしないのだから、ＶＴＲのディスクを貰ってそれを定時ニュースで流せばよい。勿論そんなものは私は見やしないけれどね。

経済が上向いているとの報道もあるけれど。それは果たして本物？

（つべこべ文句ばかり語っているのは、このところ負けてばっかりの所為です。関係者の皆さん、あしからず。）

〔マスク〕

いま出回っているマスクの大半は化学製品の不織布の為、なかなか風化しない。道のそちらこちらに投げ捨てられたマスクが散らばって、時折通る車の起こす風に舞う汚いごみと化している。

これらは、いずれ焼却処分するしかないのだろうが、資源としてみるともったいない限りだ。

例の「アベノマスク」は、福祉関係などに５００億円以上の金をかけてばらまくそうだ。

一般に配ったものと併せて１０００億円。ひょっとすると２０００億円もの無駄遣いだ。こんな「あべこべのマスク」より別なものが欲しいと現場の皆さんは言っていますよ。

感謝の手紙を貰ったとか、備蓄すればいいじゃないかとか、ほかの病気がはやった時使えばいいとか言っているが、それは平時の場合、現在の明らかな「異常事態」に使う言葉ではないよ。

「感謝の手紙」なるものを書いた人に、カメラの前に立って貰いたいものだ。

それとも、もう緊急事態は脱してしまって、平常に戻ったと言いたいのだろうか。何らの「科学的根拠」も示せず、毎日いたずらに空疎な文言を並べ立てているだけにすぎない。

〔収束の行方はどこへ漂っていくのか？〕

各国で、ワクチンの開発がすすめられていて、年内に完成して実用化されるという報道もある。本当なら、たいへんうれしい限りだけれど、仮にうまくいったとして、１憶二千万人分。一気に投与できるのだろうか？マスク一つ配るのに、数か月もかかっているというのに。

現実には最低でも、１億五千万個から２億個のワクチンが必要だ。（テストとかそのほか使うはずだから。）

２億個のワクチンが、一朝一夕(いっちょういっせき)に製造できるとは思えない。

副作用だって、慎重に考慮しなければならないでしょう。

たとえ、それらをクリアしても、実施段階で長い時間がかかるだろう。

年内に実験段階が終わっても、量産、配布、に少なくとも数か月。注射するとなると、１億本以上の注射器が必要になるのでは？

果たして、ほかの国の分は間に合うのだろうか？

（今のようなときに、菅原大先輩が元気でおられたら、・・・と改めて思うのです。）

来年のオリンピックに、果たして間に合いますかね？？？

〔定額給付金〕

低額でなく高額給付金を！

役所の窓口では、

「検討した結果、今回の支給額は〇〇円に決定しました。」

私の頭の中にある日本語の翻訳辞書ではこうなります。

「お上が特別の御慈悲をもって与える金だから、つべこべ言わずありがたく頂戴して、無駄遣いなどせぬように。」

そろそろおあとがよろしいようで。

茨城県の難読地名とその由来（6）

木村進

小浮気【こぶけ】　取手市

旧藤代町の藤代駅から西へ少し行った6号バイパスと旧6号国道が合流するあたり「小浮気」という地名があります。藤代駅近辺からこのあたりにかけては、小貝川が蛇行しており、一帯は湿地帯や沼地だったそうです。また利根川も近くで2つの大きな川に挟まれた地域です。過去に何度も水害で苦しめられてきたといいます。

地名の由来は「角川日本地名大辞典」によると、「地名の『ふけ』は、深田とか沼沢地の意」と書かれています。
日本全国で「浮気」という地名を調べてみると、滋賀県守山市に「浮気町（ふけちょう）」という地名があります。
この地名の由来については、『守山市誌［第3巻］』に、「地名は水澤の池、水がふけるの意味で、野洲川の伏流水が至る所から湧き、泉や小川となって里中を流れ、常に水気が立ちこめる風景を呼ぶ名称です。」とあります。
浮気という字を当てた理由については、『守山往来』の村のおこりの項目には、「浮気の村は、沼地のようでありました。ちょうど、浮いているような状態で、水面はいつも雲がたなびいているようでした。水が常に上昇して紫気天に浮かびて動かずという状態であったので、浮気の名があるといいます。」とあります。

アイヌ語などを見てみましたが、沼地に対するようなことばに「フケ」などという言葉は見つかりませんでした。従って、従来からある古アイヌ語（縄文語）ではなく、奈良・平安頃から使われだした言葉なのかもしれません。

まあ本格的な「浮気（うわき）」はいけないけれど、小浮気くらいならいいのでしょうかね。

また、「浮気」と似た地名を探してみると、「浮田」（ウキタ、ウキ）という地名が青森、岩手、福島、京都、大坂、宮崎に見つかりました。
これも　「ふけ」＝　布気、婦気、福家、更などが「泥深い田んぼ」も意味したことばとも言われ、「浮気」と「浮田」は同一の意味だとも書かれたものがありました。

「浮田」の地名から「宇喜多」氏の名前が生じたようです。

全隈【またぐま】【またくま】　水戸市

水戸市の西側赤塚方面にある「全隈町」は今の住所表記の読みは「またぐまちょう」となっています。しかし、かなり多くの文献に「またくま」とも表記されています。

調べると、平安時代の辞書である「和名類聚抄（わみょうるいじゅしょう）」に記載のある常陸国那賀郡の郷名（22ある）の一つに「全隈郷」があり、この郷名がこの町の町名の元となっています。
「角川日本地名大辞典」によると、この地は大塚古墳群（成沢町）、小鍋遺跡（木葉下町）、開江宿遺跡・下荒句古墳群（開江町）、田野遺跡・馬場尻古墳群（田野町）、西原遺跡・西原古墳群（堀町）などの古墳時代の遺跡が多数あり、全隈町には石器時代に石斧を作ったところと思われる「集石跡」があり、石器時代の遺跡として貴重だと書かれています。
また、奈良期には正倉院文書などでは「全熊郷」とも書かれていたとあります。
さらに、戦国期には「またくま」「又熊村」などと書かれた資料が見つかっています。

地名の由来については、「今昔水戸の地名」（堀口友一著）によれば、
「新編常陸国誌の原本頭書には、マタグマトハコノ郷ハ、スベテ那珂川ノクマニアル地ナレバナルベシと記している。とあり、これが地名の起こりであるとすれば、スベテは全であり、クマは水の曲がった処の片隅であるから、那珂川に対する位置を示して全隈と名づけられたものである。」と述べています。
多くの書物がこの解釈で終わってしまっているのですが、この地名にはもう少し深い意味がありそうです。
まず、「隈（くま）」と「熊（くま）」は同じように発音され、漢字で書かれているものにはこの2つが混在しています。
もう少し全国の「隈」のつく地名を探してみたら、たくさん出てきました。これらを眺めていくと、ある推論が浮かんできます。
（1）九州に圧倒的に多い
（2）吉野ヶ里町松隈（まつぐま）のように古代の遺跡がある場所がとても多い。
（3）阿武隈川（あぶくまがわ）や逢隈（おおくま）などの地名から、これらの地が「大熊（おおくま）」と呼ばれていた時代もあり、「隈」は「熊」と同じように使われていることも多い。また、日本神話に出てくる「イザナギ」が地下にあるとされた死者の国「黄泉の国（よみのくに）」へ行き、亡き妻のイザナミに会うが、穢れた姿を見て逃げ帰ります。
この死者がすむ黄泉の国に棲むのが「隈（くま）の神」だといいます。
そして「イザナミ」を葬っている場所は「隈野」、「隈処」などと書き、その場所を熊野古道で知ら

れる吉野の「熊野」としている考えがあるといいます。すると、この「隈」には死者（身分の高いもの？）を葬る場所という意味合いもありそうに思えます。

水戸の「全隈」などは古墳もたくさんあり、近くには初期に那珂川から上流側を開拓した「建借間命（タケカシマのみこと）」の墓といわれる「愛宕山古墳」があります。

タケカシマは初代那賀郡の国造（くにのみやっこ）で、九州の佐賀県出身の人物とも言われています。それは「常陸国風土記」の中に、賊をおびき寄せるために、海辺に繋いだ船の中で、「杵島（きしま）曲（ぶり）の歌を七日七夜歌った」とあります。　この杵島は肥前国（現佐賀県）の郡名にある名前です。全国の「隈」「熊」「熊野」などという地名を見ていくとどこかで共通するものがありそうです。

高道祖【たかさい】　　下妻市

国道１２５号線を下妻駅の方からつくば（東）側に少し行き、小貝川を越えた先に「高道祖」と書かれた場所がある。「こうどうそ」と読んでしまいそうだが、「たかさい」と読む。

この国道の旧道側（北側）に「道祖神社」「高道祖神社」「白山神社」などの神社が並んでいる。この神社のある一帯は、小貝川からも高くなっており、まわりからも少し高台となっている。高台にある道祖神を祀った神社がある地域が「高道祖」と呼ばれるようになったことは間違いないだろう。

ではその読み方だが、「道祖」を「さい」と読むのはどうしてだろう。

道祖神（どうそじん）は村の入口、道の別れるところ、峠の頂上などに祀られているが、これは災いの侵入を食い止める役割があるといわれている。また同時に子孫繁栄を願うという風習がこめられている地域がほとんどだ。そのため、男女の石像などを祀る他に、男根の形をした石や木が多くの場所で奉納されていたりする。

全国の「道祖」の名前が付く地名を調べると、

・茨城県下妻市高道祖（たかさい）
・栃木県真岡市道祖土（さやど）
・埼玉県さいたま市緑区道祖土（さいど）
・大阪府茨木市道祖本（さいのもと）
・山口県山口市道祖町（どうそちょう）
・佐賀県佐賀市道祖元町（さやのもとまち）

「道祖」の読み方も「サイ」「サヤ」「ドウソ」の３つの読みがあったが、「サイ」「サヤ」が多いようだ。やはり道祖神は「サイの神」と一般によく言われていたのだと思われる。

「サイの神」「サエの神」「サヤの神」など、たぶん地域により少し呼び方は違うが、皆同じだろう。賽の神、障の神、幸の神、境の神（さいのかみ、さえのかみ）などと書く場合もあり、これは道祖神とは同じものだ。

「賽の神」「境の神」も、村や部落の境に置かれ、他から侵入するものを防ぐ神とされ、邪悪なものを防ぐ役割を果すためにこの名がつけられたようだ。

地名の読み方が「サイ」「サヤ」などとなっていることは、かなり昔から道祖神は「どうそじん」などとは呼ばれずに、「サイの神」などと言われていたものと思われます。

角川日本地名大辞典には、高道祖について、「当地は高台にあるので、「高」が付されたか。とあり、また道祖神の信仰篤く、道祖神社の境内には男根をかたどった大小の石像が奉納されており、毎年正月14日の祭礼には男女の○○をかたどったお供え餅を奉納し、参詣者に配られる。もとは神社に隣接して籠宿があり、宿の南方にある「片葉の葦」とよばれる池に入って沐浴し、お籠もりをすれば下の病が治るという信仰があって、宿が繁盛したという。」と書かれている。

常陸旧地考（３）　　菊地孝夫

○行方郡

風土記に行方郡、東南に並び流海、北に茨城郡云々。古老の曰く、難波長柄豊前大宮馭宇天皇之世、癸丑の年（６５３）、茨城國造の小乙下壬生連麿、那珂國造の大建壬生直夫子等、惣領高向太夫中臣幡織田太夫等に請うて、茨城の地八里合わせて七百余戸を割き、別に郡家を置く。

故に行方郡と称するのは、倭武天皇が天下を狩巡り、海北當是此の国を経過し征平、駐頓して即、槻野之清泉にのぞみ、水に臨み、手を洗う。玉を、井に落とす。今、行方里の中にあり。玉清井と謂う、さらに車駕を巡らし、現原之丘に御幸する。御膳供奉。その時天皇四望し、侍従を顧みて曰く、

輿を止め徘徊し目を挙げて、駒望山阿海曲参差、委蛇、嶺頭浮雲、峪腹霧を抱き、物色可怜郷體、且つこの地名を甚だ愛し、地名称す行細國は、後世あとを追い、なお行方と号す。

〔風　俗（ところのつたえ）に云う立雨零行方之國〕云々。

和名鈔に行方郡行方郷あり、今なお行方村ある、これなり。

いま按ずるに風土記をかんがうるに、この地浪逆、霞の二浦にそって東南へ長く張り出て村々並びよく連なり、景色佳きによって、並細の國と名においしなるべし。それは、並細と褒めたるなり。クハシ、約、カなれば、ナメカシと呼びのを、後世訛りってナメカタと云える。

さて、ナメは並の古言にて、万葉集に、馬並て、舩並て、などと読む。行の字を書くのは、字書に行は行伍また列行成りなど註したるによるなり。方は、假字なり。

和名鈔に陸奥國行方郡、また登米郡に行方郷あり。

馭宇天皇：孝徳天皇

立雨零行方之國：立ち雨降る行方の国とでも読むのだろうか？

○鹿嶋郡

風土記に香嶋郡、肥田氏は大海、南は下総・常陸の境の安是湖、西は流海、北は那賀・鹿嶋の堺の阿多可奈湖、云々。

古老曰く、難波長柄豊前大朝馭宇天皇之世、巳酉年、大乙上中臣子、大乙下中臣部兎子ら惣領高向太夫に請いて、下総國造部内軽野以南一里、那珂國造部内寒田以北五里を割き別けて、神郡を置き、其所に天之大神社、坂戸社、沼尾社、三処合わせて、香嶋天之大神、これ郡名かな、云々。

和名鈔に、鹿嶋郡鹿嶋郷あり、今の鹿嶋村をはじめ、このあたり、広く坂戸、沼尾、大船津にかけて鹿島郡にてありし也たり。

いま按ずるに、神名帳に鹿嶋郡鹿嶋神宮あり、なおこの神のことは神社の部に云うべし。

さてこの大神の鎮まりし地を、神嶋と名に負える。鹿の字も香の字も借り文字なり。鹿の字について言う説も、うけがたし。後世鹿の多くいるは、鹿の字につきたる説のいで来てより、このものを獲ること厳しく戒めてより、多くの年を経るうちに、おのずから多くなりしものなり。大和の春日の鹿もこれに同じ。

さて神嶋というも万葉集一三巻の詞書に備後國神嶋云々。

十五巻に、神嶋の　いそまの浦、云々。

神名帳に、備中國小田郡神嶋神社など有。カシマといえるは、カミシマの訛りなり。

万葉集九巻に、みなべの浦　しおな満ちそね鹿島なる、云々。

一七巻に、かしまよりくまきをさして、云々。これは詞書に、能登郡香嶋津に従う、舟を発して、熊來村に行きし時作りし歌と有り、和名鈔に、能登國能登郡加島郷あり、これなり。

さて、嶋とは周囲に限りが在って、一区画の所をいう。海中のみには限らず、山川などが（周囲を）巡って、一區なる所をいう。

応神天皇の都も、大和國、輕という地を輕島と言い、欽明天皇の宮所は、師木という地なのを、師木嶋と言うなどと同じ。くわしくは、本居翁の「国号考」に云う（所）は、おきてみるべし。

本居翁：本居宣長。鬼澤大海は、その子息太平の弟子

○那珂郡

風土記に那珂郡、東は大海、南は鹿嶋茨城郡、西は新治郡下野國の堺の大山、北は久慈郡。

國造本紀に、中津國造、志賀高穴穂朝の御世、伊予國國造同祖、建借間命を（國）造に定め給い云々。

古事記に、神八井耳命、は常道中津國造云々。

和名鈔に、那珂郡那珂郷あり、今、下野國那須郡より東海に落ちる川を、那珂川という。那珂・茨城の境いなり。その源、下野の境い近く、那賀村ありこれなるべし。中という地名は諸國にとても多い。

和名鈔に、武蔵國那珂郡那珂郷、筑前國那珂郡那珂郷、伊豆國那賀郡那賀郷、讃岐國那珂郡、紀伊國那賀郡那賀郷、美濃國安八郡那珂郷、各務郡那珂郷、阿波國那賀郡、越後國魚沼郡那珂郷、石見國那賀郡、伊予國風早郡那珂郷、大和國平群郡那珂郷、宇治郡那珂郷、吉野國那珂郷、壱岐國壱岐郡那珂郷あり。

建借間命：たけかしまのみこと　常陸國造祖とされる

○久慈郡

風土記に、東は大海、南西は那珂郡、北は多賀郡、陸奥の境い岳、云々、

古老の曰く、郡より以南、近くにある小丘、鯨に似たり。倭武天皇それを、久慈と名付けたる、云々と有り、鯨は〔久治良〕なり治と慈とは音が似通っている。
國造本紀に、久自國造、志賀高穴穂朝之御世、物部連の祖、伊香色雄命の三世の孫、船瀬乃宿祢、國造賜る、云々。
和名鈔に、久慈郡あり、久慈郷無きは〔欠け〕落ちたるもの。久慈濱村在り。久慈・那珂の境を流れる川を久慈川という。
万葉集二十巻に、
くじかはは　さけくありまて、云々と見えて、いにしえにいと名高き川なりけり。
これをある説には久慈の母として、久慈郡にある母なりといえるは誤認なり。
久慈川はさきくあり待てなり。山川などをも人になぞらえて、かくさまに詠める歌の常なり。白埼は先くあり待て　とも詠（よ）める。

○多珂郡

風土記に多珂郡は、東南に並び大海、西北は陸奥・常陸の二國の堺の高山、云々。
古老曰く、志賀高穴穂宮、大八州照臨天皇之世、建御狭比命、多珂國造に任ず。ここに人初めて到って、地躰歴験、以て、嶺険し、丘崇し。それゆえ多珂之國と名づく、云々。
国造本記に、高国造は志賀高穴穂朝の御世、彌津呂岐命ノ孫美佐比命を、国造に定め賜いき。
和名鈔に、多珂郡多珂郷あり。この郡は陸奥に続いていて、高山多く、地形やや高ければ、高郡なること、風土記の説の如し。
國造本記にも、高國と書きたり、地名に多く高某とあるのは、大方高きがゆえの名と聞いている。
さて、多珂と書くは、民部式に諸国部内郡里などの名はなべて、二字を用いよ、云々と有る。この時に改めたるもの成り。中つ國も同じ。
出雲〔國〕風土記にも一字の地名を、神亀三年（726）に、二字に改めしことが多く見える。
多珂という地名、播磨國多珂郡、陸奥〔國〕行方郡多珂郷、備後國三上郡多珂郷など和名鈔に見える。
以上一一郡、延喜式和名鈔に載る所今なお在り。

○西那珂郡

國誌に、東は茨城郡地と交わり、南は新治真壁郡地と交わり、西北は、下野界、按ずるに、西那珂郡及び西河内郡の名、古来所見なし。のちの人のいわゆる疑いなく、いま地勢を以て、考えるに西那珂郡の地、北はすなわち茨城郡の地なり、西河内郡、南は古くは新治郡、北は筑波真壁郡の地なり。
東鑑に，那珂西那珂東郡有、疑う、一郡の中につきて、東西に分かつは、始め両郡にあらず。

○西河内郡

國誌に、東北は真壁郡と交わり、西南は下野下総国と相対し、鬼怒川を以て界となす説見える。
右の二郡世に伝わる所、常陸の郡圖にこれが載り、古書には見えず。共に旧郡に非ざる証しのみ。今ほぼその実得難し。その詳らかを知る。且つ、以上の通り前の十三郡をなすのは、今皆存じて、國人の流伝既に久しく、臆見を以て妄り、私に進退を為し難い。　彼共にここにこの書を以て識者を待つ、云々。

○笠間郡

國誌に、茨城郡西に笠間場有。
東鑑に藤原時朝、笠間の地を領す。かれ笠間を以て名と為す。子孫伝授、久遠に至る。
近世、天正年中、佐竹氏為すところ、共に笠間氏、其の私邑を以て、建てて郡と為す。今かんがうべからず、笠間氏譜、公署下具、云々　（続く）

江戸幕府の職制

打田昇三

急速に変化する現代に昔の話をしても意味が無いとは思うが、テレビでは時代劇が良く放映されるので、「幕府役人の職務概要」なども知っておいたほうが楽しめる。私は何十年も前に神田の古書店で入手した「有職古實略解（ゆうそくこじつりやくかい）」と言う立正大学で昭和初期に出した本と、同じ頃に復刊出版された「官職要解（かんしよくようかい）」という明治中期に出された江戸時代迄の公務員役職解説書を持っている。
「有職古實略解」は天皇・朝廷など国民を苦しめた権威主義の解説書なので庶民には無縁だが、大日本帝国を支えた精神構造の概要を知るには便利であり、「官職要解」は大化の改新から江戸時代までの公務員について、其の役職が明記されているので歴史を学ぶ者には役立つ本である。
両書によれば、江戸時代（其れ以前を含めて）

の国家公務員？が何をしていたのか其の概略がわかるので、時代劇なども現実味を持って観賞することが出来る。どちらも貴重な本であるから歴史が認識され出した現代では得難かったと思う。

徳川家康は慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原合戦に大勝し、三年後に征夷大将軍となって江戸幕府を開いたが、特に職制を定めた訳では無いらしく戦国時代の侭で二代、三代が過ぎたらしい。

やがて職務分担の必要性から「老中・若年寄・大目付・目付・奉行」などの役職が出来たけれども頂天に居る将軍が優れた人物だと役人も出る幕は無いが、草創期を過ぎれば将軍も「飾り」に過ぎ無くなる。政治に細かく気を配ったのは家康・秀忠・家光と、分家から入った八代将軍・吉宗ぐらいらしいから、仕事は重臣の任務となる。

江戸城には本丸と西丸があり、将軍が本丸に居て西丸には将軍継嗣が置かれたというが、其処にも老中・若年寄・側用人から側衆・書院番・小性組などが居たらしいから其の経費だけでも大変！主要な職務を列記すると、概ね次の様になる。

御大老　幕末に櫻田門外の変で水戸浪士らに討たれた井伊直弼以外に知られていない職であるが、現代だと内閣総理大臣以上の重職であるから太政大臣と同じ様に任ずべき人材が居なければ置かれなかったらしい。

溜詰　定員四名、江戸城内黒書院溜の間に詰めて老中と政務を議する。徳川支族と重臣から選ばれ特定されていた。

御老中　又は「御年寄衆」「宿老」と呼ばれ初めは一万石以上の譜代大名から選ばれたが後に二万五千石以上とされた。現代の内閣閣僚に相当し、定員は四人か五人で月番制度らしい。

若年寄　若い年寄りと言うのも妙な名称だが、元は「旗本支配」と言ったらしく城を持たない高級旗本が任命された。定員四・五名で月番勤務、職務内容も勝手掛とか馬掛、女中掛など名前が悪い。

奥御右筆組頭　書記官筆頭職なので其の分、文字が上手で身分が高く無いと務まらない。主に重職の記録を担当した。

表御右筆組頭　一般的な書記官の親分であり、部下に日記方、分限（財務）方、家督方、吟味方が有ったらしい。

大目付　監察官で定員四～五名、本務は悪事糾弾であるが、諸大名への触れとか儀礼、殿中非常時の対応、将軍継嗣御殿見廻り、立会など政務にも関わる。現代の会計検査院・警察・税務署・検察庁などと同じ様な仕事内容なので好かれない任務であったろう。

御目付　大目付と同じく監察・糾弾が本務ではあるが、対象が大名以外であったと思われる。台所見回り、勝手向き、上水道方、日記方、芸術方、濱見回りなど取り締まる対象ごとに任務が与えられ、特に江戸城内の火災防止が重要な仕事で、火の番組頭とか挑燈（ちょうちん）奉行などを兼務した。

寺社奉行　全国の社寺、社寺領民、神官僧尼、楽人、盲人、連歌師、陰陽師から囲碁将基師、さらには徳川家に縁故の有る農・工・商の民などを支配して其の訴訟を裁判した。

町奉行　時代劇の主役である。江戸府内（東京都内中心部）の行政・司法・警察・駅伝（郵政）などを掌握する大役だが、寺社奉行管轄の事は除外される。定員二名で南北両奉行所に分かれた隔月勤務らしいから、現代の警察に比べれば羨ましいほど楽であったろう。

奉行所ごとに與力二十五騎、同心百二十名が居り、同心は定廻り、勤廻り、吉原掛り、本所・深川籾蔵橋掛りから町会所・自心番担当、牢屋掛などなど職務担当が細分化していたらしい。

また、職員では無いが町内ごとの町年寄、名主などは町奉行の支配下に置かれていたようである。然し、警察署らしきものが江戸府内に南北二か所しか無かったというのは、治安の面で徳川幕府の失政であったと思う。

御勘定奉行　現代の大蔵大臣かと思ったのだが主務は諸国代官を管轄して収税、徴発労働、金銭・年貢穀物の出納及び幕府領内住民の訴訟を扱う。定員四名で公事方（訴訟担当）と勝手方（財政担当）があり勝手方は江戸城内に置かれた。

ただし、重要な案件は寺社・町・勘定の三奉行が主となり「評定所」で訴訟が審理された。

囚獄　別名を牢屋奉行と言い、幕臣・石出帯刀氏の世襲とされた。現代は警察署

ごとに拘置場所があるけれども、江戸時代には疑われた者は直ぐに小伝馬町の牢屋に入れて頂けたようで、其処には牢屋奉行の下に同心、見廻り役など怖い役人がお待ちしていて親切に苛めてくれたらしい。

寄場奉行　石川島に在り、懲役刑が確定した囚人を監督する。「囚人」であるから、どう考えても優しくはされない。

道奉行　江戸の道路・水道を管理したらしいが途中から廃止された。

御勘定吟味役　現代の会計検査院で有ろうと思うが、四名中二名が訴訟担当と言う。金銭にトラブルは付きもの？

御蔵奉行　幕臣(旗本)に支給する禄米を扱う。

御金奉行　金庫番である。収支両担当があった。この他に、油漆奉行、道中奉行などが置かれたが寺社奉行・町奉行・勘定奉行などの三役が主となり、訴訟を審理判決するのが「評定所」である。

評定所　江戸城和田倉門外に在って三奉行が集まり政治・刑罰を議し訴訟を判決する場所で有る。(重要事件など必要な場合)其の際には老中、大目付、目付以下や将軍の側衆なども臨席したと思われる。

其の他、現代で言えば高級官僚に該当する幕府の役職として、御作事奉行（工事担当）、御普請奉行（建築土木工事担当）、小普請奉行（造営担当）などが置かれていたから其の経費だけでも大変！（現代でも同様だとは思うが…）

更に、諸大名や旗本などには次の仕事が与えられていた。殿様も楽では無い。

御側用人　時代劇では悪い奴の見本の様に登場するが、将軍の身近に勤務するのであるから上手く立ち回れば権力を得られる。

御側衆　奥向小性、小納戸役、医者などの人事を管轄する。六十数名居て交代制だが、此の中、三名だけが毎日勤務で諸事を扱かったので「御側御用取次」と呼ばれた。

御奏者番　諸大名が将軍に拝謁する際の取次をしたり、諸大名の江戸参勤時に将軍の命令を伝えたりする役なので、凡庸な人物では務まらない。

高家　忠臣蔵の吉良上野介で知られる。先祖が有名な家系、武田・織田・六角、畠山など二十六家の子孫が選ばれている。官位は高いが禄高は低い。吉良の様に職務の無い者は「表高家」と呼ばれた。

詰衆　譜代大名が毎日交代で、殿中の「雁の間」に詰める。

御小姓衆　三十名近くが交代制度で将軍の側近に侍して用務を務めた。

御小納戸衆　将軍の理髪、食事から庭の手入れなどを扱う近侍の役であり、手下が百人程居たらしい。

進物番　「しんもつばん」と言い、献上品や将軍からの下賜品を扱う。

御納戸頭　「ごなんどがしら」将軍手持金や財産の番役である。定員二名で下に多くの部下が居た。

御腰物奉行　将軍の帯びる太刀、将軍から大名に与える太刀、大名から献上される太刀を扱う。其れだけの仕事で定員二人、下に組頭などが居たという。献上品が多かったのか、暇だったのか？

御廣敷用人　御臺様（将軍の夫人）用人とも言う。大奥の用度を監督し庶務を掌る。大奥出入り者の監視も兼ねる。

此の他に姫君付き役人などが居り、女中では年寄・上﨟（じょうろう）・中﨟以下、多くの階級が有り、多勢が居た。

医師　医学に通じていたかどうかは不明だが、典薬頭を筆頭に奥医師、番医師、寄合医師、小普請医師などに分かれていた。

江戸時代は医者に掛かるにも身分差が有った…と言うことになる。典薬頭は本人の能力はで無く家柄で決まったらしいから、将軍などは長生き出来ない。

御儒者　学者のことである。戦国時代から文学は僧侶の担当の様になっていたのだが、徳川幕府では五代将軍・綱吉が儒者・林道春の子孫に命じて学問として復興させたらしい。神田昌平坂に学問所が置かれた。

後代になってからだと思うが、書物奉行とか和学講談所などが幕府に置かれた。

御書院番　図書館職員のような名前だが、時代劇には良く登場する。殿中内衛の他に将軍の外出時には前後警衛の任務が有る。また、特命により遠国に出張し、毎年交代で浜松城在番勤務を行う。番頭の下に六組が有り組頭の下に五十人程の番士が居たほか、更に其の下に輿力や同心が居た。

御小性組　書院番と同じ任務・編成だが、浜松城勤務はしなかった。

屋敷改　定員四名、新地奉行とも言い書院番と

小姓組の出役、どういう内容か知らないがことのほか多用で有ったらしい。名称からすると何か探索でもさせられた？

新御番　三代将軍・家光の時代に置かれたというが、江戸城内警護と将軍が出かける際の先駆けが任務。六組あり一組に番頭、組頭、二十名の番衆が居た。将軍の親衛隊か？

御鉄砲百人組　江戸城大手三之門に詰めて城内警備を担当、将軍外出時の警護もする。

其の他、御持弓頭・御旗奉行・御槍奉行など数え切れない程の役職が置かれていた。

時代劇には良く登場する禄高三千石未満の旗本で役職の無い者は「小普請組」と言い、造営工事に作業員を出させられたが代金二両で免除されたらしく、暇な旗本の代名詞になっている。

一万石に満たない領主は大名にはなれないが、御大身であるから其れなりの身分で、例えば志筑・佐谷辺りを領していた本堂氏などは「交代寄合」と言って参勤交代をさせられた。那須衆とか美濃衆とか、それなりの由緒有る者が是に該当したので、真偽の程は不明だが本堂氏も「源頼朝のご落胤」を称していたらしい。

地方勤務の諸役

主なものとしては次にあげる職があった。

京都所司代　朝廷に関する一切のことを掌り、公卿を監督し訴訟を裁き、寺社を管轄。

大名が任命される。関西方面の諸大名の監視も任務であったらしい。

京都町奉行　定員二名、東西に役所が置かれた。

京都代官　畿内の幕府領を管轄する。

京都火消　当然だが京都の火災消防、近畿地方の大名が交代で担当させられた。

禁裏付　定員二名　皇居守護の任務だが実際には天皇の監視役であったろう。

二條在番　二條城の守衛役、幕府重臣の大番頭が交代で勤務した。

伏見奉行　伏見市街・社寺の警戒・造営担当

大坂御城代　大名の役で大阪城に駐屯し警備と近辺の訴訟を担当、重要任務とされた。

駿府御城代　駿府は徳川氏の故地であるから重視され大名が任命された。此の他に城代の補佐として役職の無い大名などから二名が補佐として付けられた。

其の他、長崎・浦賀・山田・奈良・日光・堺・佐渡などには奉行が置かれ、幕府領各地には税務署の様な「代官」がいたのである。

《　お知らせ　》

いよいよ今月号から「打田昇三の太平記」連載がスタートします。

『太平記』（たいへいき）は、ご存知のように日本の歴史文学の中では最長の作品とされています。

全４０巻あり、これを打田昇三氏の歴史視点を加えて、本誌への投稿となりました。本誌は紹介するスペースの関係で、最後まで数年かかると思われます。

氏のこの長編への意気込みは驚くべきものであり、最後まで執筆がなされ、この会の存続も続きますよう願って止みません。

ご期待ください！

【特別企画】

打田昇三の太平記（一 - 1）

○ はじめに

「太平記」は題名と全く逆な十四世紀の戦乱を記述した軍記物語であり全四十巻にも及ぶ膨大な量がある。主役が武士なのは当然ながら、此の頃は「南北朝時代」と呼ばれており、天皇の地位を巡る皇族間の醜い相続争いが原因になっている。

具体的には第八十八代・後嵯峨天皇の子である後深草天皇と亀山天皇とが、後代のアメリカで起こる南北戦争を先取りした様に対立した為に当時の武士たちも、それぞれ南北両派に分かれて戦わざるを得なくなり其の結果、諸国武士団が活気づいて応仁の乱から群雄割拠の戦国時代へと移行し日本の歴史が血腥く多様化したのである。自慢するような話ではないが、其の為に当時の国民が苦しめられたのであるから「悪政の教訓」として永く後世に伝えて置かなければならない。

現在の天皇家は北朝系（北朝鮮ではない）らしいのだが、なぜか大日本帝国時代には北畠親房・楠木正成・新田義貞など南朝と呼ばれる後醍醐天皇側に味方した武士達が忠臣とされていて、北朝方に付いた足利尊氏らは逆賊にされてしまった。近世でも尊氏を擁護する発言をした国会議員が辞職させられたらしく「足利（市）のタカちゃんと遊んだ！」と日記に書いた親戚の子供が警察に怒られた…と言う笑い話もあった。有難い事に現代は逆賊も死語に近いから太平記を公平に読み、偏見の無い解釈をすることが出来るのである。

本題に入ると、鎌倉幕府を開いた源氏は三代で滅

び西暦一二〇〇代の初め頃から平氏系の北条氏に権力が移った。北条氏は形式的に皇族や公家から将軍（征夷大将軍）を迎えて是を傀儡とし自らは将軍を補佐する「執権」の地位に居た。
第八代執権・北条時宗の時代、西暦では一二七〇年代に「文永・弘安の役（蒙古襲来）」が起こり、日本は挙国一致で国難を克服した。強敵を退けた後に国力が衰えることは否めないが、北条時宗の死で幕府の力が弱まり、其れ迄は武家に抑えられていた皇族が急に元気になって愚かにも南北に分かれて対立したのであるから「大日本帝国は万世一系の皇統」などと言うのも怪しくなってくる。
少年時代に「振り込め詐欺」の様な教育を受けたお蔭で「権威と伝統」に不信感はあるが、物語では「太平記」が面白いと聞いたので是を現代向きに書き変えて見よう…と不遜な決意を固めた。吉川英治先生の大作・私本太平記の様に創作物語として書けば良いのだが、素人には出来ない相談である。そこで太平記の原本を、なるべく原文に忠実に現代文で書くこととしたのである。
太平記の著者とされる「小島法師」は、南朝方の児島高徳とも言われるが確説では無いらしい。原本は上下三十巻の長編なので何処まで続くか分からないけれども「太平（平和）」は全人類の悲願であろうから其れを祈りながら努力する。

◎太平記・巻第一

○後醍醐天皇御治世、附・武家繁昌の事

現代では飛鳥時代前期辺りが天皇制の初期とされるようだが、昭和二十年（敗戦）までの感覚で言えば、神話の世界を引きずる大日本帝国の初代・神武天皇から九十五代目に当る後醍醐（ごだいご）天皇の時代に、武臣（武家の統領）相模守・平（北条）高時と言う者が居た。此の者が、上は天皇の徳に背き下は臣下の禮を失ったのである。
其の為に日本国中が乱れて、合戦の煙が天を曇らせ鬨（とき）の声が地上を騒がせ続けること四十余年に及び、国民の誰一人として一日も安心をして豊かに暮らすことが出来無かった。何故にそうなったのか？その理由を質せば一朝一夕のこと（昨日今日の出来事）では済まされなくなる。
元暦年中（西暦一一八五年頃）に鎌倉の右大将（右近衛大将）源頼朝が平家を追討した功績で後白河法皇から六十六か国（日本全土）の総追捕使（そうついぶし＝現代の警察庁長官）に任命されたのだが、頼朝は更に是を最大限に利用して諸国に「守護」を置き、庄園ごとに「地頭」を置くことに成功した。つまり、日本全土が新興勢力の武士階層に支配される状態になったのである。
源頼朝の後は長男の左衛門督（さえもんのかみ）頼家、次男・右大臣の実朝が続いて征夷大将軍となり頼朝と合わせて是を鎌倉三代将軍と呼んだ。然しながら、源氏はお家芸の内部抗争によって頼家は実朝に討たれ、実朝は頼家の子・悪禅師公暁（くぎょう）に討たれたので僅か三代・四十二年で絶えてしまった。裏の事情が有るとは思うが…其の後、頼朝の舅・遠江守平時政の子である陸奥守義時（政子夫人の弟）が幕府執権職となったので北条氏は労せずして鎌倉幕府の実権を握った。
此の時代の太上天皇（だじょうてんのう＝退位して当代天皇を後見した上皇・法皇）は後鳥羽院である。此の人は、武家勢力が力を増せば皇室の権威が衰えることを心配して北条義時を滅ぼそうと「承久の乱（一二二一）」を起こした。庶民の迷惑などは全く考えていなかったらしい。
天下は騒然としたが、両軍の主力が宇治・瀬田で戦った結果、官軍と称した後鳥羽上皇方の兵力は僅か一日も持たずに敗北が決定的となり主犯？とされた後鳥羽上皇は庶民並みに捕らえられ隠岐の島刑務所に送られてしまった。是により北条氏は予定通り天下を手中にしたことになる。
義時の後は武蔵守泰時―修理亮（しゅりのすけ）時氏―武蔵守経時―相模守時頼―左馬権頭（さまごんのかみ）時宗―相模守貞時と七代続いて政権を担当した。武家の政治を心配する声も有ったが其の徳は国民がほぼ満足するものであり、北条氏は頂点に立ちながら同族の位階は四位（軍人では近衛中将級）を越えず、謙虚にして常に自戒の心を持ち礼節を重んじ周囲に恩を施した。
承久の乱以後、北条氏は皇族又は皇族に近い藤原氏から一人を鎌倉に迎え、是を「征夷将軍」と仰いで奉仕した。承久三年には洛中（京都市内）南北二か所に北条一族を据えて、是を「両六波羅（りょうろくはら）」と称し主に西国の統治に兼ねて京都の警護に当たらせた。また永仁元年（一二九三）には「筑紫探題（つくしたんだい）」を置いて九州の統治と夷敵襲来の防備に備えさせた。
此の様に、統治者として相応の事をしたので日本国内は概ね北条氏の命令に服していたけれども「朝陽犯さざれども残星、光を奪わる」の例えが有る様に、北条氏が武家を重んじて公家を軽視した訳ではないが、所に依っては「地頭が強くて領家（本来の領主）が弱く」諸国では「守護が重視されて従来の国司が軽視される」様な兆候が出始

めたのである。其の結果として朝廷の権威は薄れ武士の力が日々に増すことになった。
　そうした風潮に心を痛めていたのは当時の皇室であり、国民の為では無く自分たちの為に何とかしなければ！と思い立ち、承久の乱の失敗を忘れた訳では無いが、武家の政治介入を排除して朝廷の権威を回復しなければならない！とする野心的悲願を諦めず、じっと我慢の日々を送っていた。
　その様な時代に北条時政から九代の後胤に当る前相模守平高時（仏門に入って「入道崇鑒…にゅうどうそうかん」と号す）が執権の地位に就いた。此の人事は鎌倉幕府にとって正に天地命運を革（あらた）めるべき危機が訪れたことになる。
　古今の例を参考に高時の治政を見ると、言語行動が軽率で他人の批判を浴びる事が多く政治が正しく行われず、古代中国の悪王がした「犬道楽」などで国民の血税を浪費して遊び呆け、先祖の功績を汚す行為を繰り返した。当然ながら見る人は眉を顰（ひそ）め、話を聞く者は非難した。
　此の時に皇位に就いて居たのが第九十六代の後醍醐天皇である。第九十一代・後宇多天皇の第二皇子で、母親は藤原忠継の娘で談天門院（だってんもんいん）と呼ばれた典侍（ないしのすけ・六番目の予備皇后）藤原忠子になる。即位が三十一歳と遅いのは、南北両朝廷が交互に天皇を出す順番制の関係である。後醍醐天皇は古代の善政を手本とした理想的な政治を心掛けたらしいのだが。

○関所停止の事

　其の頃、諸国の境や街道の要所には「関所」が設けられていた。其の目的は治安維持のほか、禁止事項の周知、税の徴収、或いは非常時の対応などであるが、天下の往来なので何事も無ければ閉鎖されることは無い。ところが鎌倉幕府（執権・北条高時）は、諸国から徴収した年貢の輸送に支障が出ると言う単純な理由で、有ろうことか元亨元年（一三二一）には僅か二か所を残して所々の関所を閉鎖してしまった。関所以外の場所を抜ければ罪人にされる。商人や所用で他国へ行く者などが多大の迷惑を被ったのである。
　此の年は天候不順で梅雨時も降雨が少なく各地が旱魃（かんばつ）の被害を受けた。都の周辺でも田圃に青い苗が見えず赤土だけが目についた。当然ながら飢饉が起こり、粟一斗が銭三百もする状態であったが幕府は何の対策も講じなかった。
　当代の後醍醐天皇は此の事を聞いて「飢饉の原因が天皇の不徳に有るならば、天は予（われ）一人を罪すべし。国民に何の罪科が有る！」として、朝食を断ち宮中の食糧を放出されたほか、都の治安を司る検非違使に命じて、富裕層が買い占めていた食糧を定価で買い取り庶民向けに売らせた。両者に損は無く大勢の民が救われたのである。
　また此の天皇は訴訟が起きた時には自ら裁判所に出向いて被告・原告両者の言い分を聞き、公平な判断が下るようにしたので問題が起きたり不平不満が尾を引いたりすることは無かった。ただし天皇が庶民生活の細部にまで干渉し過ぎると、古代中国の諺に有るように微妙な不都合が生じてくることは否めないのである。

○立后の事、附・三位殿御局（おつぼね）の事

　文保二年（一三一八）、此の年は後醍醐天皇が即位した年であるが平穏な時代では無かった。皇位を回る南北朝廷の対立に加えて、僧兵同士の争いも記録されている。そうした中で同年八月三日には後西園寺太政大臣と呼ばれた藤原実兼の娘・禧子（きし）が中宮（准皇后）として宮中の弘徽殿（後宮）に送り込まれた。西園寺家から准皇后を出すことは既に五代に及んでおり、是は幕府執権の北条氏が西園寺家を尊敬していたからである。
　禧子中宮は十六歳で容姿端麗、古代中国の伝説に登場する美人にも劣らない女性で有ったから周りの者も後醍醐天皇の寵愛を受けること間違いなく、中宮から皇后に立てられるのも時間の問題であろう…と思っていたのだが、後醍醐天皇は北条氏が嫌いであるから禧子のことも無視した。原本に「君恩葉よりも薄く…」とある。是では何の為に後宮に入ったのか分らない。そうかと言って庶民の様に実家に逃げ戻る訳にも行かず四季の移り変わりに涙して傷心の日々を送っていた。
　その頃に素性は分からないが阿野中将公廉と言う中級公家の養女として中宮に仕えていた女房が居り、三位殿の局（さんみどののつぼね）と呼ばれていた。此の女房が後醍醐天皇の目に止まったというよりも天皇誘惑に成功したのであろう。
　後醍醐天皇の周りには禧子中宮以下百二十人程の寝室待機専門職の女性が居たらしいけれども言語道断な話であるが、天皇は三位殿の局こと阿野廉子に丸め込まれて政治向きのことも全て下請けの怪しい女に任せ切りにした。歴史を顧みる時に楠木正成とか新田義貞とか名和長年とか児島高徳とか南朝の忠臣と呼ばれた武士たちを初めとして当時の国民は、愚かな天皇と悪女とに苦労させられたのだが、なぜか其れを学校では教えない。

○儲王御事（ちょおうのおんこと）

原本の書き出しが「螽斯の化（しゅうしのけ）行われて」とある。是はイナゴ、バッタなど昆虫類の様に繁殖することらしい。後醍醐天皇は余程、暇だったようで、周りに置かれていた多くの女性から昆虫に例えられる程に皇子・皇女を次々と生ませ、其の数は十六人にもなっていた。其れだけでも無責任な人物であるが、従来の歴史では天皇を悪く言えなかったから誰も黙っていた。

第一皇子の尊良（たかなが）親王は内大臣・藤原定房の養子にされた。母親が大納言の娘であり少年時代から学問に精通していたので、名所旧跡を訪ねては風流を愛でる感傷的な暮らしをした。二番目は同腹の女児で少女時代から仏門に入り風雅の道に通じていた上に高徳の僧の教えを受けて問答が出来るほどの学識があった。

三番目の男児は民部卿三位（みんぶきょうさんみ）と呼ばれた高級女官を母として生まれ幼時から利発聡明なことで知られていたので、後醍醐天皇は此の子を次の天皇に！と思っていたのであるが朝廷の権威が廃れ、幕府の指示で大覚寺統と持明院統とが交互に天皇を出す事になっていたから後醍醐天皇系の出番では無いので仏門に入れた。四番目の男児も同様に僧となり皇族を貰った寺院では箔が付いて喜んだが、後醍醐天皇としては不本意である。「皇室後継者の選定が時を得ている」と書いてあるが選ばれない皇子には不満が残る。

○中宮御産御祈祷の事、附・俊基偽籠居の事

「中宮」とは本来は皇后の宣旨（勅命）を受けていない皇妃のことであるが、明治以降を除き歴代皇妃は中宮又は其の下の女御（にょご）の侭の女性が多く、皇后に立てられた者は少なかった。

「偽籠居（いつわりろうきょ）」とは幕府の目を晦ます為に作戦として天皇に怒られた事にして宮中を退出し、特殊任務に就くことである。

本文に入ると元亨（げんこう）二年（一三二二）の春頃から、朝廷では中宮（立后の事に登場した禧子）懐妊の祈祷として京都近辺の諸寺・諸山の高僧に命じて怪しげな護摩焚きなどを行わせた。中でも法勝寺（白河天皇建立の寺）の高僧・圓観上人と真言宗の文観僧正（南朝興隆を画策した僧）の二人は宮中に檀を構えて貰って、仏教で言う如来・観音・菩薩・童子などに総動員をかけて拝んだけれども護摩焚きの煙と騒音が酷かっただけで何の効果も無かった。実は此の御祈祷は名目で本来は北条氏を祈り倒す極秘の会合であった。

後醍醐天皇の「幕府憎し！」とする気持ちは其れ程に強かったのであるが、回りの者から意見を聞きたくても秘密が漏れる懼れがあったから極々内輪の者にしか相談が出来なかった。秘密命令を受けたのは日野（藤原）中納言資朝、蔵人右少辨（くらんど・うしょうべん＝秘書官兼太政官中級管理職）日野俊基、四条中納言隆資、尹大納言（いんだいなごん＝法制担当の高官）藤原師賢、平宰相（参議）成輔の五人だけで、其の五人が信頼できる武士を選んで連れて来ることになった。然し幕府に見付かれば只では済まない陰謀であるから賛同者は少ない。錦織判官代と呼ばれた三河国足助谷（あすけだに）出身の武士・足助重成と奈良の僧兵など数える程しか居なかった。そこで、日野俊基が本格的にセールスに回る事にしたのだが幕府の目が有るから、現職の侭では動けない。その頃に比叡山の僧兵たちが何らかの要望で天皇に直訴して来た。それを取り次ぐ時に俊基はワザと読み違えた。現代でも式典の司会で「本日は…」と言うところを「日本は…」と言った人が居るが、天皇の御前である上に直訴した寺院の名称を間違えたのであるから只では済まない。周りの公家たちは鬼の首でも取った様に非難した。日野俊基は大いに恥じて宮中を退出し、責任を感じて謹慎をする…という名目で屋敷に籠り、山伏姿に変装してから屋敷を抜け出して築城の為の地形・地質調査を行うと共に諸国の民心把握に努め、特に幕府の評判などを調べて回ったのである。（続く）

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額 2,000 円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田　昇三　0299-22-4400　兼平智恵子　0299-26-7178

伊東　弓子　0299-26-1659　木村　進　080-3381-0297

編集事務局　〒315-0014　石岡市国府 4-3-32　（木村）

HP　http://www.furusato-kaze.com/